
桜吹雪

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜吹雪

【Nコード】

N1176BA

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

新一と小さいころ遊んだエリザベス・リヴィア。

彼女はイギリス人の父と日本人の母のハーフ。

母親は新一の母、工藤有希子の友達で父親はイギリスの名監督。

新一より一学年下。新一：5月生まれ エリザベス：3月末生まれ。

幸か不幸か、蘭の存在を一切知らずに育つ。

そして、淡い夢を抱くのだ・・・

「いつか、新一兄ちゃんのお嫁さんになる。」

しかし、それは とても儂い夢で・・・？

1 アルバム

「待ってよ、新一兄ちゃん！」

「あのなあ・・・その ちゃまってやめろよ。」

「何で？」

「なんでも。」

「・・・私と新一兄ちゃんまは一学年離れてるのよ。
でも、同じ年の5歳！！

それを我慢しておにいちゃん扱いしてあげてるのに。」

「だったら、新一兄ちゃんでもいいだろ。」

「私からのせめての嫌味なの！！
ちゃんまはやめないんだから。

新一兄ちゃんま、もっとあそぼー」

「はあ・・・。」

「・・・ち。・・・いち？新一！」

「うわっ」

「なによ、失礼ね・・・」

「わりいわりい。」

目を開けたら蘭の顔がドアップだったから・・・」

「それが彼女に対しての反応？
って思ったわよ。」

「だから、謝ってるだろ？」

「はいはい。」

蘭は軽く受け流す。

「でも、珍しいね。」

新一がアルバム広げてるなんて。」

新一の机にはアルバムが広がっている。

赤のアルバムが開かれていて

隣に青とオレンジが積み重なっていた。

「ああ・・・なんか見つけてよ。
赤が俺と蘭がうつってるアルバムで、
青が俺単独。オレンジは・・・」

「オレンジは？」

「あれ、なんだっけ。」

「何だっけってねえ……」

蘭はパリリとオレンジのアルバムをめくった。

そこには有希子の字で

”新一とリヴィア家”と書かれていた。

「リヴィア家？」

「ああ……母さんの女優時代の友達だよ。
確か、イギリスの有名監督と結婚して……一人娘生んだんじゃ
なかったっけ。」

俺たちより一学年下の。」

「一学年ってことは……高2よね？」

「ああ。」

「今はイギリスにいるの？」

「いや・・・東京に入るらしいぜ。」

母さんが前・・・藤 聖華学院に入学したって・・・」

「聖華!？」

「あ、ああ・・・」

「お嬢様学校よ？」

「入学金だけで1千万!」

「アホらし・・・」

「すごいね〜。」

「じゃあ、ちなみに青欧学院っていうのも・・・」

「おぼっちゃま学校だけど・・・。」

「だよな・・・。」

「なんで？」

「前、そのリヴィア家に進められたんだよ。」

「小学校から大学まですべてエスカレーターで」

「就職から何まで全て方向性を考えてくれる良い学校だったさ。」

「まあ、俺はそのときから探偵になるって決めてたし・・・。」

「し?。」

「蘭がいけない男子校なんて行っても意味ねえだろ?」

新一が悪戯な笑みを浮かべると

蘭は真つ赤になって「バカ・・・」とつぶやいた。

1 アルバム（後書き）

新連載です！

これも・・・末永くよろしくお願いします

2 リズ

日曜日の午後。

蘭はいつものように新一のお昼を作っていた。

ピンポーン

「ねえ、新一。出てくれる?」

「ああ、わかった。」

見ていた小説をテーブルに置いた。

「はい。」

『リズです。』

「・・・え？」

『エリザベス リヴィア！！』

「リズ！？」

『だから、最初からそう言ってるでしょ！』

「わりい。

今開ける。」

新一は玄関へと向かう。

カチヤ

「お久しぶり。

新一兄ちゃま。お元気にしてた？」

「相変わらずだな、リズも。」

「ええ。

ママが久しぶりに会いにいらっしやいって言うもんだから。
もう、何年も前なのにね。

急に何を言い出すかと思えば……。」

「まあ、あがれよ。」

「新一兄ちやまの活躍、見てるわ。

とても感心してるのよ、みんな。

さっすが、優作さんの血をひいてるって。」

「・・・それ、俺が褒められてんの?」

「び、微妙だけど・・・多分そう。」

スタスタ

「あれ？誰か来てるの？」

足音が聞こえて、不思議そうにリズは言う。

「ああ。」

カチヤ

「新一、お客さん？一応紅茶持ってきたけど……。」

「サンキュー。」

「……誰？」

「ああ、毛利蘭。俺の幼馴染で……。」

「恋人？」

「そう。」

「蘭、こいつはこの間アルバムで見た」

「ああ、藤 聖華学院に通ってるお嬢さん？」

「ああ。」

「よろしくね。えつと・・・」

「エリザベス。リズって呼んでくださいな。」

「リズちゃんね。」

「そういえば・・・有希子さんは？」

「母さんたちは、今ロス。」

「取材？」

「いや、4年まえからあつちに住んでんだ。」

「じゃあ、大変ね。」

「まあ、大変だけど・・・」

「今、家事のほとんどは蘭が助けてくれるからさ。」

新一は蘭に視線を向けると蘭はあきれたように

「どっかの誰かさんに繋がったキュウリのベチャベチャサラダに
ジャガイモのとけたカレーを食べさせるようなかわいそうなこと
できませんから。」

とつぶやく。

「おい、まだこの間のことを根に持ってんのかよ。」

「別にー。」

新一が手伝ってくれようとしたこと、ありがたい気持ちでいっぱいよ。」

「嫌味だろ、それ絶対。」

「そんなことないわよ。」

2人だけの会話になったのが、面白くないのか・・・

リズは頬を膨らませて、話を遮った。

「蘭姉ちゃま！」

「え？な、なに？」

「私と新一兄ちゃん、母が女優仲間だったことは聞いてますか？」

「うん。」

「もともと、私の母は有希子さんの付き人だったんです。」

「へえ。」

「小学校、中学校と同じで、バツタリ偶然オーディションで知り合
い、

有希子さんが合格して母が落ちました。

そこで、母は一からやり直そうと有希子さんの付き人になったん
です。」

生い立ちを話すと満足げにリズは笑う。

「でも、おば様・・・ほんと、女優仲間多いよね。」

「褒められたら図に乗るからな、すぐ・・・。」

「そんな言い方ないでしょ。」

「・・・リズ、帰りますね。」

「え？」

「来て30分も経ってねえぞ？」

「いいんです。」

もともと、顔を見るだけのつもりだったから。」

「そっかぁ・・・」

「リズちゃん、また来てね。」

「はい。」

そのときは蘭姉ちゃんの手料理を期待してます！」

ドアを出て、もう一度振り返って・・・笑顔。

天使みたいな子だな〜と蘭もつられて笑顔になって、わかれた。

「ハーフって、やっぱり可愛いね。」

「そーだな。」

「肌が白くて、ウエーブのかかった長い髪がいいよね。」

色が金茶つてところが、リカちゃん人形みたい。

そっいえば、哀ちゃんも日本とイギリスのハーフだったよね。」

「まあ、灰原よりリズのほうが可愛げがあると思うけど……。」

「それ、哀ちゃんに言っちゃっしょ？」

「……今のは冗談っつーことで。」

「なによ、それ。」

新一は冷や汗かきながら蘭を説得させた。

2 リズ（後書き）

リズちゃんは、どっぴい子なのでしょっか？

3 甘えんぼ

「新一兄ちゃまあ。

一緒にどこかお出かけしましょーよお。」

「忙しいからまた今度な。」

「そう言ってもう、3週間もお出かけしてないわ。
リズもそろそろ退屈すぎる……。」

そう、リズはあれから毎日通っている。

「それより、学校は大丈夫なのかよ。
米花町とほぼ正反対だろ。お前の家。」

「大丈夫よ。ママには許可とってるし。」

「そういう問題じゃなくて……。」

「リズちゃんは、部活動とかやってないの？」

紅茶そ持ってきた蘭が問いかけた。

「最初は、新一兄ちゃまに習ったサッカーをやるうと思っただけ
ど・・・

運動部自体なくて。」

「そうなんだ・・・」

「聖華は、大和撫子が教訓みたいな感じだからね。
だから私、茶道部だもん。」

「へえ。」

「授業の一環として、護身術とか、軽い運動とかはあるけど
怪我したら大変だからって普通の学校よりはあまりやらないの
よね。」

「変わってるのね。」

「そうよ。」

お嬢様学校だからって体育の授業が少ないの、うちの学校くらい
なもの。

まあ、怪我をさせたら援助が断られたりするからね・・・

怖いんだと思うわ。」

「かもね。」

話しが終わるとリズはコクツと紅茶を飲む。

そして、ひらめいたように目をぱちっと開けた。

「あ、私。今日は泊まっていくね。」

「はあ!?!」

「まあ・・・明日は休みだし。」

私も今日は泊まってくつもりだったし・・・いいんじゃない?」

「・・・勝手にしろ。」

「やったー!」

新一兄ちゃま。いつものように一緒に寝ようね。」

「・・・一人で寝ろ。」

「あーん、意地悪う。」

「高校生の男女が一つの部屋で寝るのが間違ってるんだよ。」

「・・・じゃあ、私の分の部屋づくりもしとかなきゃね。」

「お前は別!」

「・・・ムー!

なにそれ。蘭姉ちゃまだけヒーキだ、ヒーキ!」

「何とでも言え。」

しばらくリズは駄々をこねていたが、

納得したのか、抗議に疲れたのかおとなしくなった。

「Boringg.....」

「え?」

ぶつぶつと英語をつぶやき始めた。

「G o t o b e d t o g e t h e r !

B o r i n g ! r i n g ! B o r i n g !

「あのお、そんなこと言ってもなあ・・・」

「なんて言ってるの?」

「つまんない。って言ってるんだよ。」

「・・・一緒に寝てあげたら?」

「ダブルベットに3人で寝れねーよ。」

「嫌なら帰ってもいいんだぜ? リズ。」

「う・・・っ」

「新一、意地悪すぎ。」

蘭は呆れたように呟いた。

3 甘えんぼ（後書き）

Love not suitable とかぶりそつで怖いです・

なんか、構成も同じになったらどうしよう。。。

け、けど！

中身はぜんぜん違うから。。。！！

大丈夫ですよ、皆さん！

4 親子

「最近、新一君のお家行ってるみたいだけど
あちらの方には迷惑かけてない？」

「大丈夫よ、ママ。」

「でもねえ。有希ちゃん達はロスに移住したんでしょ？
やっぱり心配だわ。」

「何を心配してるの？
あっちには、ちゃんとして恋人作ってたわよ。
んで、彼女をまじえて3人で遊んでるの。」

「あ・・・そうなの？
なら、よかったわ。でも、新一君が恋人ねえ？
あ。まさか、蘭とか言う子じゃない？」

「そうだけど・・・ママ、知ってるの？」

「ええ。有希ちゃんに良く聞かされてたから。
良い子でかわいい子だってね。」

「……良い子って……そりゃ、彼氏のお母さんには良い子にするよ。」

ミルクティーをコクツと飲みながら

不貞腐れたようにリズは言う。

「あら、やきもち？」

「そんなんじゃないもん。」

「でもねえ。」

確かに、新一君と結婚してくれたらって思ったわ。有希ちゃんなら、嫁姑で苦労しなさそうだしね。」

「それだけの理由？」

「それだけじゃないわよ。」

新一君なら、安心できるしね。」

「さっき、心配だと言ってたじゃない。」

「それなりに、やっぱり心配するでしょ？」

「……大人の都合って面倒くさい……。」

「もお！」

リズも、子供みたいなこと言わないの。

パパが来たらもっと甘えるくせに……。」

「そりゃそうよ。」

パパ、年取ってからできた子供のせいか、

私のこと甘やかすもの。」

「甘やかすってわかってるのに、甘えるのね？」

「ママだってパパを射止めるためにそうしたんでしょ？」

「わかってるじゃない。」

リズは満足そうに笑う。

「でもなあ。」

「なーんで新一兄さま。」

青欧学院に入らなかつたのかしら。」

「あそこの男子高校、お金持ちだけじゃ入れないのよ。」

「そうね・・・確か、資産家で頭が良くてスポーツができるところ
しか

とらないのよね。」

「そうよ。」

だからお陰で今は全校生徒50人前後だわ。

お金目的な聖華よりはマシだけど・・・。」

「新一君なら全てトップで入れそうなのにな。」

「青欧学院、全国模試ではトップでも20位だったらしいわ。」

新一兄ちゃんまは、全国模試8位。」

「全国ってことは、全国よねえ。」

「そうよ。」

全国。アメリカもイギリスもゼーんぶ含めて。」

「すごいわねえ。」

「でも、一位だったの、兄ちゃんまの友達らしいわよ。」

「へえ。」

「黒羽ナントカだって。」

「でも、ほんと残念よね。」

「ででしょ〜?」

冷め切った紅茶を一口。

「彼女がいるなんて・・・
残念ねえ。」

「だよね。」

「あなた、ずっと好きだったのにな。」

「ほんとだよね。」

「あきらめる？」

「まさか。」

ママが教えてくれたんでしょ？
恋は実るのを待つんじゃない、自分から行け。
相手の心はつかむものじゃない、盗むもの。
こちらに向かないなら奪ってしまうのが一番！」

「まあ、そうやってママは25歳も年上のパパを狙ったの。」

「最初は有希子さんに目をかけていたパパを落として
主役を取ったんでしょ？」

「そう。」

だって、そのときは有希ちゃん、沢山主役とってたんだもん。少しくらいもらったっていいでしょ？」

「それは、私も同感よ。」

でも、当時ママは20でしょ？

45のパパを良く好きになったねえ。」

「好きになってから結婚じゃ遅かったのよ。結婚してから好きになったの。」

「うわー、ママってば小悪魔！」

「でしょ？」

とんでもない親子の会話。

子が子なら、親は親。

子は親の背中を見て育つというが

まさにそのとおり。

「だから、リズムもがんばんなさい。」

「がんばるよ。」

「どーんな手をつかっても！」

「ママみたいだね。」

「大丈夫。応援してるわ。」

「ありがとう。」

「まずは、この後どうするかよねえ。」

「その、蘭さんって子は何が得意なの？」

「うーん・・・あんまり良くわかんない。」

「料理がうまいっていうのは聞いたけど・・・。」

「部活も聞いてないし。もう、引退したしね。」

「そう。じゃあ、まずは料理をマスターしなさい。」

「和洋、中華、フランス、イタリア・・・全て。」

「ええ!？」

「相手の男の人がどのジャンルの料理が好きでも対応できるようにね。」

「わかった。」

「あと、勉強とスポーツ。」

全般習わせるわ。」

「うん・・・」

「勉強は、学校トップを狙いなさい。」

「はい。」

「スポーツは・・・」

サッカーは、得意だったわね。

護身術では何が一番できた？」

「空手。」

「だったら、黒帯を狙いなさい。」

「うん。」

「あとそうね・・・一週間に3回。

肌と髪の毛のケアね。

外を磨かないと。」

「はい。」

「ママはね、これを死に物狂いでがんばったわ。

それで今の幸せがあるのよ。」

「うん！私、がんばる。」

「3カ月間で全てをマスターする。」

「・・・どう？体的には無理があるかしら？」

「・・・ううん。」

大丈夫！これくらいできないとね。」

「そう。だったら容赦ないわよ。」

「はい！」

4 親子（後書き）

どうなるのでしょうか・・・？

この時期設定は・・・秋ごろだとお考えください。

これから一気に三ヶ月間がハイスピードで進んでいくので・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1176ba/>

桜吹雪

2012年1月6日08時50分発行